生息域外における絶滅危惧種ヒナモロコの定着－「国内希少外来種」をどのように扱うか（予報）

鈴木 規慈（三重大学大学院生物資源学研究科）

国外からの外来種だけでなく、国内からの外来種である国内外来種（国内移入種）の増加が問題となって久しい。国内外来種における問題として、ハスなどの肉食性魚類による在来種の捕食（例えば、Kurita *et al*. 2008 など）や交雑（例えば、Konishi and Takata 2004；Miyake *et al*. 2011 など）の事例が知られている。しかしながら、これらの問題が生じにくい種（例えば、ワタカ（大原ほか 2010）など）については、その影響評価や今後の対策についての議論が少ない。特に、その種が本来の生息地で絶滅危惧種に指定されている場合（例えば、イチモンジタナゴ（大原ほか 2012）など）については、知見が少ないだけでなく、その取り扱いが難しいために、議論も十分ではない。

そこで、本研究では、環境省により絶滅危惧種ＩＡ類に指定されているコイ科のヒナモロコ *Aphyocypris chinensis* の移入個体群を対象として、その生息状況を把握し、移入先の生息地（以下、移入先）における現状を評価することを目的とした。

移入先における生息状況を把握するために、ヒナモロコの生息が確認されている静岡県内の一河川において、2012 年 1 月から 2013 年 10 月の期間に、約 4 ヶ月に 1 回（計 8 回）野外調査を実施した。生息域において 23 地点の調査地点（2×5m）を設置し、各地点において、タモ網による定量採集（5 分間）実施した。また、各地点において、水温、水深、流速（5 段階；中島・うおの会 2011）を計測した。

調査の結果、移入先では、地点間における生息の有無及び生息個体数の差異が認められた一方で、調査期間を通してヒナモロコの定着が認められた。また、生息域全域において、最も多く採集された魚類はヒナモロコであった。すなわち、移入先においては、国内外来種であるヒナモロコが優先種になっていた。

本発表では、生息域において絶滅の危機に瀕している一方で、移入先において優先種になっているヒナモロコの現状を踏まえながら、ヒナモロコを含めた「国内希少種」の移入先における取り扱いや対策の方向性について議論したい。